

山形県真室川町における観光資源としての 「森林トロッコ列車」の利用形態

中 牧 崇

本研究では、山形県真室川町のまむろ川温泉梅里苑における「森林トロッコ列車」の利用形態について、5月・9月の連休のアンケート調査を中心に明らかにした。

森林トロッコ列車の利用者の年齢層は幅広く、二世帯あるいは三世帯の子ども連れが中心である。利用者の居住地は、山形県を中心とする東北地方と関東地方にほぼ限られる。梅里苑への利用交通手段は自家用車（同乗を含む）が圧倒的に多い。トロッコ列車の利用者は家族・友人を通して、その存在をはじめて知ることが多いが、トロッコ列車の「顔」の保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることを知らない傾向が強い。トロッコ列車の利用者の大半は、さまざまな施設を利用しながら梅里苑に長時間滞在するが、町内あるいは隣接市村（でのイベント）とセットで観光による移動も目立つ。

本研究を通して、真室川駅からの二次交通が脆弱である、保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることに対して利用者の関心が低い、といった課題も析出された。

keywords：森林トロッコ列車、利用形態、近代化産業遺産、アンケート調査、真室川町

目 次

1. はじめに
2. 調査方法
3. 森林トロッコ列車の利用者の属性
4. 森林トロッコ列車に関する認知とその乗車回数
5. まむろ川温泉梅里苑内・苑外での利用形態
6. おわりに

1.はじめに

2000年代に入ってから、森林鉄道⁽¹⁾の遺物・遺構（車両・廃線跡など）が注目を集めるようになった（例えば、西 裕之 2001:国立文化財機構奈良文化財研究所編 2008:白川 淳 2008）。この動きは、2009年に経済産業省が森林鉄道の遺物・遺構の数点を「近代化産業遺産」⁽²⁾に認定したことにより拍車がかかったといえる（例えば、岡本 憲之 2013:矢部三雄 2015）。また、同省は近代化産業遺産を観光資源として活用するためのガイドブックを発行した（経済産業省地域経済産業グループ編2010）。これは、近代化産業遺産を地域の活性化に役立てることを目指したものである。し

かし、山形県最上郡真室川町のように、近代化産業遺産に認定される前から、森林鉄道の遺物・遺構を観光資源として活用しているケースもある。

著者は、真室川町における森林鉄道の保存機関車（動態保存、2009年に近代化産業遺産に認定）が、1983～2003年には町立歴史民俗資料館の展示物として価値づけられていたのが、2004年からは町営の温泉・宿泊施設「まむろ川温泉梅里苑」（以下、主に「梅里苑」）の「森林トロッコ列車」（以下、主に「トロッコ列車」）の「顔」として、観光資源として価値づけられながら、活用されていることを明らかにした（中牧 崇2017）。

本研究の目的は、著者（中牧 2017）が詳細に取り上げていなかった観光資源としてのトロッコ列車の利用形態について明らかにすることである。真室川町役場と梅里苑は、トロッコ列車の利用者の確保が、町内の観光による活性化につながり、また製造から70年を越える動態保存の機関車が近代化産業遺産に認定されていることを、多くの人に認知してもらえると考えている。しかし、トロッコ列車の利用形態について十分把握していない。したがって本研究は、真室川町役場と梅里苑が今後のトロッコ列車の利用者の確保について

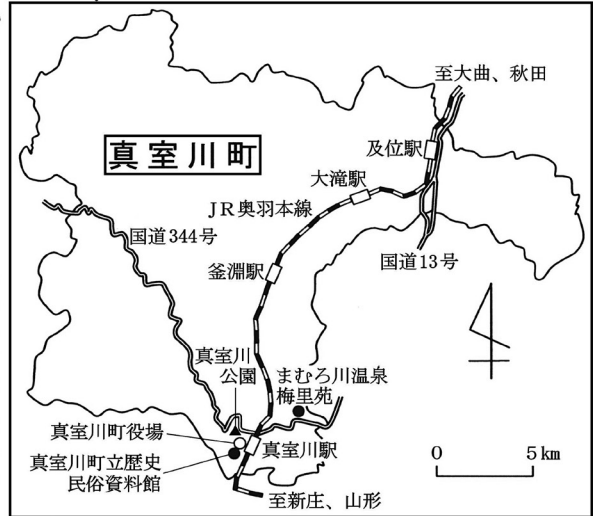
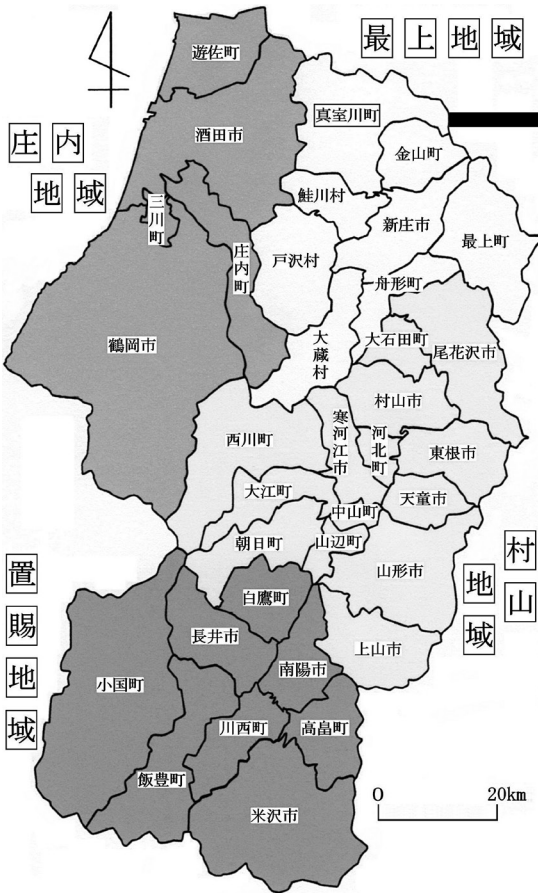


図1 山形県における真室川町の位置
 (山形県のホームページの「山形県内市町村ページ」
<http://www.pref.yamagata.jp/link/others/clink.html>
 の地図と中牧(2017)を改変)

考えていくための基礎資料になり得るといえる。
 本研究で取り上げるトロッコ列車は、保存機関車が客車(1両)と運材台車(2両)を牽引して、梅里苑の敷地で、5~10月の土曜日、日曜日・祝日に1周1,043mを走行している。乗車賃は大人も子どもも1周(1回)100円である(中牧2017)。

2. 調査方法

トロッコ列車の利用者が多い月⁽³⁾から、まず2014年5月のゴールデンウィークの後半にあたる4~6日(以下、「5月の連休」)にアンケート調査を実施した。また、5月と比較するため、2014年9月の3連休にあたる13~15日(以下、「9月の連休」)にもアンケート調査を実施した。なお、9月13日は6月14日から続いていた山形DC(デザインেশョンキャンペーン)の最終日である。

アンケート調査では、利用者に乗車前あるいは乗車後に調査票を配付し、利用者が記入する方式

で回答していただき、ただちに調査票を回収した。質問項目は、①利用者の属性、②今回までのトロッコ列車の乗車回数、③トロッコ列車の存在をはじめて知った理由、④トロッコ列車の保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることへの既知、⑤今回梅里苑へ訪れた目的、⑥梅里苑までの利用交通手段、⑦梅里苑へ訪れたことを含む今回の観光(旅行)・帰省などの日数、⑧今回トロッコ列車のほかすでに利用した、あるいはこれから利用する(予定の)梅里苑の施設の有無、⑨梅里苑のほか観光ですでに訪れた、あるいはこれから訪れる(予定の)市町村の有無である(資料1)。なお、質問項目①、⑥~⑨は記入者と同行者を対象とした回答(5月の連休は439人、9月の連休は261人、計700人)、②~⑤は記入者だけを対象とした回答(5月の連休は139人、9月の連休は82人、計221人)⁽⁴⁾である。

さらに、アンケート調査を補充する形で、聞き

取り調査⁽⁵⁾と観察も行った。

3. 森林トロッコ列車の利用者の属性

3.1 利用者の年齢層と同行者の構成

トロッコ列車の利用者の年齢層は幅広く、とくに中学生以下の子どもの利用者は46%と最も多い(高校生の利用者は皆無)。また、30歳代、60歳代の利用も目立つ(図2)。同行者の構成では、179グループのうち、家族だけが146グループ(家族+親戚、家族+友人・知人を加えると170グループ)、中学生以下の子どもを含むのが166グループを占めることから、二世帯あるいは三世帯の子ども連れによる利用者が中心である。これらの利用者のなかには、父親あるいは母親を除いた家族がトロッコ列車に乗車するケースもみられる。これは、どちらかが線路沿いで、時折手を振り、声をかけながら、走行するトロッコ列車の客車にいる家族を撮影するためである。

3.2 利用者の居住地

トロッコ列車の利用者の居住地をみると、山形県を中心とする東北地方、群馬県・神奈川県を除く関東地方にほぼ限られる。県単位の場合、5月の連休における利用者は9月のそれよりも多く、居住地が広がる傾向にある(表1-a)。しかし、ゴールデンウィーク最終日の5月6日の場合、山形県外からの利用者は103人中5人(いずれも宮城県)と少なく、関東地方からの利用者は0人であ

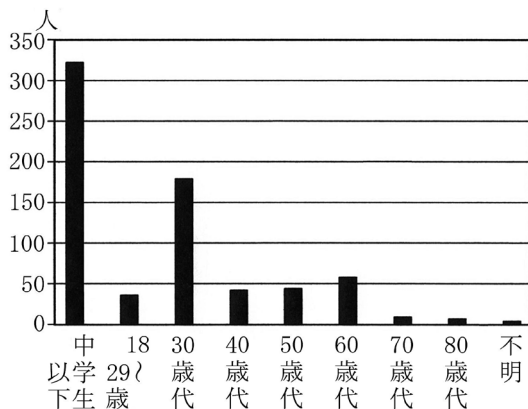


図2 森林トロッコ列車の利用者の年齢層
(アンケート調査により作成)
注) 高校生の利用者は0人。

表1-a 東北地方・関東地方からの利用者の居住地
(単位:人)

	5/4~5/6	9/13~9/15	計
東北地方	395	243	638
青森県	5		5
岩手県	3		3
宮城県	41	24	65
秋田県	23	1	24
山形県	318	214	532
福島県	5	4	9
関東地方	43	17	60
茨城県	17		17
栃木県	9		9
埼玉県	4	8	12
千葉県	2		2
東京都	11	9	20
計	438	260	698

(アンケート調査、聞き取り調査により作成)

注) このほか、大阪府が1人、居住地未記入が1人。

る。真室川町役場と梅里苑の職員からの聞き取り調査によると、関東地方からの利用者は5日までに帰宅する傾向にある。全6日間で山形県内からの利用者は532人と圧倒的に多く、利用者全体では76.0%、東北地方全体では83.4%を占める。

トロッコ列車の利用者の居住地のうち、山形県内をみると、こちらも5月の連休における利用者は9月のそれよりも多く、最上地域をはじめ、県内各地に広がる傾向にある。しかし、天童市・河北町(いずれも村山地域)、庄内町(庄内地域)のように、5月の連休には利用者が複数いても、9月の連休には0人になる市町村が目立つ。また、5月・9月とも利用者が10人以上は、真室川町内と近隣の新庄市・鮭川村(いずれも最上地域)、山形市(村山地域、県庁所在地)、東根市(村山地域、山形県内で人口増加が続く市⁽⁶⁾)、鶴岡市・酒田市(いずれも庄内地域、同地域の二大都市)である(表1-b)。

山形県内でトロッコ列車の利用者が突出している真室川町内と新庄市は、日によりその人数にばらつきがある。5月の連休における町内からの利用者は4日が222人中8人、5日が114人中9人、6日が103人中20人であり、4日と5日は少ない。こ

表 1-b 山形県からの利用者の居住地 (単位:人)

地域・市町村	5/4~5/6	9/13~9/15	計
最上地域	157	157	314
新庄市	81	45	126
真室川町	37	84	121
金山町	17	6	23
鮭川村	10	10	20
最上町	7	12	19
舟形町	2		2
大蔵村	2		2
戸沢村	1		1
村山地域	115	29	144
山形市	49	15	64
東根市	23	14	37
天童市	13		13
河北町	12		12
寒河江市	7		7
尾花沢市	6		6
西川町	4		4
上山市	1		1
庄内地域	46	20	66
鶴岡市	15	10	25
酒田市	14	10	24
庄内町	14		14
遊佐町	3		3
置賜地域		8	8
米沢市		5	5
長井市		3	3
計	318	214	532

(アンケート調査、聞き取り調査により作成)

注) アンダーラインは真室川町に隣接する市町村。

れは、町民がトロッコ列車の乗車よりも、真室川公園での第42回「真室川梅まつり」(4日には第27回「梅の里マラソン大会」が開催⁽⁷⁾)に足を運ぶことや、観光などで町外へ足を運ぶことを指向したためと考えられる。また、9月の連休における新庄市からの利用者は13日が66人中0人、14日が117人中20人、15日が78人中25人である。13日の利用者が0人であるのは、前日の午後の最上地域は大雨であったうえ、この日の新庄市民がトロッコ列車の乗車よりも、「山形 DC クロージング企画“山形 DC”ありがとう!!スマイルプロジェクト」⁽⁸⁾への参加を指向したためと考えられ

る。前者の場合、13日は曇りでも、地面が濡れていた。トロッコ列車は野外の施設であるため、前日に悪天候であれば、翌日の利用者に影響を与えるのは当然の結果といえる。

4. 森林トロッコ列車に関する認知とその乗車回数

4.1 トロッコ列車の存在をはじめて知った理由

記入者がトロッコ列車の存在をはじめて知った理由をみると、「家族・友人からの話を聞いて」が最も多いことから、口コミなどによる影響が大きいといえる。なお、同行者のなかには回答の「家族・友人」が多く含まれていると考えられる(表2)。また、「梅里苑のホームページをみて」、「真室川町役場のお知らせをみて」は、梅里苑と真室川町役場がトロッコ列車を観光資源として内外へ発信していること(中牧 2017)による効果である。

5月の連休に限ると「新聞をみて」、「今回梅里苑に来て」も多く、いずれも真室川町外からの利用者の回答である。前者は4日の「山形新聞」の記事⁽⁹⁾をみて、当日に日帰りで梅里苑を訪れたケースが中心である。このように、山形県内のマスメディアによる影響の大きさは、「テレビをみて」、「『ママの本』をみて」も同様である。また、後者の典型は4日開催の「梅の里マラソン」に参加した市民ランナーの存在である。当日に市民ランナーは参加賞の梅里苑の温泉入浴券を手にして、梅里苑を訪れている。真室川町内における観光イベントは、町外からの利用者にとロッコ列車の認知度を高めるのに効果を与えているといえる。

4.2 保存機関車に対する既知とトロッコ列車の乗車回数

トロッコ列車の「顔」の保存機関車は、近代化産業遺産に認定されている。しかし、そのことを知っていた記入者は221人中38人(17.2%)と少ない。とくに、5月の連休に限ると、139人中20人(14.4%)である。リピーター(「今回で2~3回目」、「今回で4回目以上」)でも、保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることを知っていたのは69人中20人(29.0%)にすぎない。なお、真室川

表2 どのようにして森林トロッコ列車をはじめて知ったか(単位:人)

	5/4~5/6	9/13~9/15	計
家族・友人からの話を聞いて	55	33	88
梅里苑のホームページをみて	23	11	34
真室川町役場のお知らせ*をみて	13	12	25
新聞をみて	17		17
今回梅里苑に来て	10		10
旅・鉄道関係の図書をみて	4	4	8
駅にあるパンフレットをみて	3	4	7
以前梅里苑に来て	3	3	6
真室川町役場・梅里苑以外のホームページをみて	1	2	3
テレビをみて	1	1	2
真室川町内にある梅里苑の看板をみて	1	1	2
「ママの本」**をみて		2	2
自宅から梅里苑が近いことから		2	2

(アンケート調査により作成)

注) 記入者を対象とした回答で、その数が複数であるものを表示。

*は「広報 まむろがわ」やホームページなど、**は山形県内在住の女性を対象とした子育て支援のガイドブック(出版社の所在地は山形市)。

表3 保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることへの既知と森林トロッコ列車の乗車回数(単位:人)

		知っていた	知らなかった	計
全 体	今回がはじめて	18 (10, 8)	134 (92, 42)	152 (102, 50)
	今回で2~3回目	7 (2, 5)	25 (16, 9)	32 (18, 14)
	今回で4回目以上	13 (8, 5)	24 (11, 13)	37 (19, 18)
計		38 (20, 18)	183 (119, 64)	221 (139, 82)
の町真 利内室 用か川 者ら	今回がはじめて	2 (0, 2)	11 (3, 8)	13 (3, 10)
	今回で2~3回目	3 (0, 3)	6 (1, 5)	9 (1, 8)
	今回で4回目以上	6 (3, 3)	13 (4, 9)	19 (7, 12)
計		11 (3, 8)	30 (8, 22)	41 (11, 30)

(アンケート調査により作成)

注) 記入者を対象とした回答。

括弧内の左側は5/4~5/6の回答、右側は9/13~9/15の回答。

町内からの利用者に限ると、認定されていることを知っていたのは41人中11人(26.8%)で、そのうち、リピーターは28人中9人(32.1%)である(表3)。近代化産業遺産への認知度は町外からの利用者よりも少し高いが、保存機関車の存在を知っていた住民が多いこと(中牧2017)を踏まえると、これらの数値は少ないといえる。

真室川町内からの利用者であってもなくても、リピーターであってもなくても、保存機関車が近代化産業遺産であることが十分認知されていない理由として、利用者が保存機関車を「かわいい機関車」とみなしていることが挙げられる(中牧崇2014)。それは父親と母親が小学生以下の自分

の子どもに語りかける内容でもある。また、トロッコ列車の乗車後に、保存機関車の横に付いている「近代化産業遺産」の認定プレートに目を向けていないことから、利用者が「近代化産業遺産」への関心を払っていないようすがうかがえる。これらは、トロッコ列車の利用者の確保により、動態保存の機関車が近代化産業遺産に認定されていることを、多くの人に認知してもらえると考えている真室川町役場と梅里苑にとって、残念な結果といえる。

5. まむろ川温泉梅里苑内・苑外での利用形態

5.1 梅里苑までの利用交通手段

表4 まむろ川温泉梅里苑までの利用交通手段(単位:人)

	5/4~5/6	9/13~9/15	計
自家用車(同乗を含む)のみ	433	241	674
鉄道(途中まで利用)	6	15	21
徒歩		5	5
計	439	261	700

(アンケート調査、聞き取り調査により作成)

注) 記入者と同行者を対象とした回答。

全6日間で「自家用車(同乗を含む)のみ」は700人中674人(96.3%)と圧倒的に多い。とくに、5月の連休に限ると439人中433人(98.6%)である(表4)。これはグループの大半が家族であることを意味する。記入者や梅里苑の職員への聞き取り調査、駐車場での観察によると、グループの利用では、1台に複数人が乗車するケースが大半である。遠方から梅里苑へ訪れても、大人が二人以上乗車していれば、休憩を挟みながら交代で運転することも可能である。それを象徴するように、駐車場に停車中の自家用車のナンバープレートから、関東地方から訪れるトロッコ列車の利用者もいることを確認できる。

いっぽう、全6日間で「鉄道(途中まで利用)」は700人中21人(3.0%)と少なく、記入者への聞き取り調査によると、19人が栃木県・埼玉県・東京都のいずれかの在住で、新庄行のJR山形新幹線「つばさ」号⁽¹⁰⁾(臨時列車「とれいゆつばさ」号を含む)を利用する。新庄駅からはレンタカーの利用、JR奥羽本線の普通列車に乗車、真室川駅で下車してから親族が運転する車・タクシー⁽¹¹⁾・折りたたみ自転車(本人持参)のいずれかの利用、あるいはJR奥羽本線の普通列車に乗車、釜淵^{かまぶち}駅で下車してから親族が運転する車の利用である。なお、真室川駅から梅里苑まで直接乗り入れる町営バスの利用者は0人である。また、団体旅行のバスの利用者も0人である。そのうち、町営バスは運行本数が1日4本と少ないうえ、日曜・祝日は運休である(全6日間で町営バスの運行日は9月13日の土曜日だけである)。複数の記入者から「日曜日と祝日に町営バスが走っていないのは、JRで真室川駅までやって来た人にとって不便」の声があることは、町内の観光地における二次交通(地域公共交通)の脆弱さを示唆している⁽¹²⁾。

5.2 梅里苑でのトロッコ列車と他の施設利用

梅里苑にはさまざまな施設がある。そこで、トロッコ列車のほかにすでに利用した、あるいはこれから利用する(予定)の梅里苑の施設の有無を質問してみると、全6日間で「ある」に該当するトロッコ列車の利用者は700人中627人(89.6%)と圧倒的に多い⁽¹³⁾。この627人を対象とした利用施設では、5月・9月の連休とも「公園(遊具を含む)」は計368人(「ある」の58.7%)と最も多い(表5)。これは、公園がトロッコ列車の乗場に隣接していることや、二世帯あるいは三世帯の子ども連れの利用が多いことが挙げられる。昼食時には芝生にシートを敷いて、楽しいひとときを過ごすようすもみられる。5月の連休における温泉・食事・買物・宿泊の利用者が9月のそれよりも突出しているのは、トロッコ列車の利用者の居住地が広がる傾向にあることと関係が深い(3.2参照)ためである。

梅里苑で他の施設も利用することは、苑へ訪れること自体を目的としているトロッコ列車の利用者が多いことのあらわれである⁽¹⁴⁾。これは、苑が真室川町内での観光による滞在時間を長くするうえで、重要な施設であることを意味する。なお、トロッコ列車の利用者のうち、苑内での宿泊は全6日間で700人中41人(5.9%)と少ない。これは、トロッコ列車の利用者の居住地が最上地域を中心とする山形県内に特化していること(3.2参照)や、日帰りが全6日間で700人中484人(69.1%)を占めることによる。また、帰省や観光など(2~6日間)では帰省先(真室川町内・町外)や旅行

表5 森林トロッコ列車のほかにすでに利用した、あるいはこれから利用する(予定)のまむろ川温泉梅里苑の施設(単位:人、複数回答を含む)

	5/4~5/6	9/13~9/15	計
公園(遊具を含む)	197	171	368
温泉	209	86	295
食事	107	51	158
買物	94	54	148
梅里苑に宿泊	27	8	35
森林コテージ	2*	6**	8

(アンケート調査により作成)

注) 記入者と同行者を対象とした回答。

森林コテージの*は日帰り、**は宿泊。

先（真室川町外）で宿泊するケースが多い。さらに、梅里苑の宿泊客がチェックアウト後、トロッコ列車を利用しないで直ちに去ってしまうケースもみられる。梅里苑の売り上げの向上を考えた場合、今後はトロッコ列車の利用と宿泊をリンクさせる取り組みも必要であろう。

5.3 梅里苑のほかに観光で訪れた（訪れる）市町村

梅里苑のほかに観光ですでに訪れた、あるいはこれから訪れる（予定の）市町村の有無を質問してみると、全6日間で「ある」に該当するトロッコ列車の利用者は700人中97人(13.9%)である⁽¹⁵⁾。この97人を対象とした市町村では、最上地域をはじめ、山形県内に特化している(表6-a)。とくに、

表6-a まむろ川温泉梅里苑のほかに観光ですでに訪れた、あるいはこれから訪れる（予定の）山形県の市町村（単位：人、複数回答を含む）

	5/4～5/6	9/13～9/15	計
最上地域	52	35	87
新庄市	17	8	25
真室川町	22		22
鮭川村		19	19
戸沢村	5	2	7
金山町	4	2	6
最上町	4	2	6
大蔵村		2	2
村山地域	16	4	20
尾花沢市	8		8
河北町	4		4
東根市		4	4
天童市	2		2
寒河江市	1		1
西川町	1		1
庄内地域		5	5
鶴岡市		5	5
置賜地域		1	1
米沢市		1	1
計	68	45	113

(アンケート調査により作成)

注) 記入者と同行者を対象とした回答。

アンダーラインは真室川町に隣接する市町村。

表6-b まむろ川温泉梅里苑のほかに観光ですでに訪れた、あるいはこれから訪れる（予定の）山形県外の市（単位：人、複数回答を含む）

	5/4～5/6	9/13～9/15	計
北海道地方		1	1
函館市		1	1
東北地方	11	3	14
青森県青森市		1	1
宮城県大崎市	1		1
秋田県横手市	5		5
〃 湯沢市	5		5
〃 秋田市		2	2
計	11	4	15

(アンケート調査により作成)

注) 記入者と同行者を対象とした回答。

5月の連休における利用者は真室川町内が22人、新庄市が17人と多い。これは、前者が「真室川梅まつり」(「梅の里マラソン大会」を含む)に、後者が最上公園(「カド焼きまつり」の開催期間⁽¹⁶⁾)に足を運ぶケースが多いためである。また、9月の連休における利用者は鮭川村が19人と多い。これは、^{ほねさきわ}羽根沢温泉、鮭川村エコパーク、「トトロの木」の愛称がある小杉の大杉(「トトロの里マラソン大会」の開催期間⁽¹⁷⁾)に足を運ぶケースが多いためである。すなわち、トロッコ列車の利用を含む梅里苑での滞在と、町内あるいは隣接市村(でのイベント)とセットで観光による移動が目立つ。

山形県外をみると、5月の連休における利用者は秋田県南東部の横手市・湯沢市でそれぞれ5人である(湯沢市は真室川町に隣接している)。9月の連休における利用者は2市とも0人になるが、秋田市以北の市で1～2人存在する(表6-b)。真室川町が山形県北東部に位置しているためか、5月・9月とも福島県以南の市町村は0人である。

6. おわりに

本研究では、山形県真室川町のまむろ川温泉梅里苑における観光資源としての森林トロッコ列車の利用形態について、トロッコ列車の利用者の属性からトロッコ列車の利用とセットになっている苑内・苑外での行動まで、アンケート調査を中心

に明らかにしてきたが、本研究を通して、真室川駅からの二次交通が脆弱である、保存機関車が近代化産業遺産に認定されていることに対して利用者の関心が低い、といった課題も析出された。

今後は、近代化産業遺産を観光資源として価値づけている他地域での研究を行い、真室川町との比較・考察をすすめることを検討課題としたい。

本研究は、2015年日本地理学会春季学術大会(於:日本大学)で発表した内容を加筆・修正したものである。研究をすすめるにあたり、まむろ川温泉梅里苑と真室川町役場の職員の方々には大変お世話になりました。また、東洋大学社会学部の小林正夫先生、高崎経済大学経済学部の大島登志彦先生には貴重なご助言をいただきました。ここに記して厚くお礼申し上げます。

注

- (1) 森林鉄道とは、山で伐採された木材の搬出を目的に建設された専用鉄道である。日本では1906(明治39)年に津軽森林鉄道(青森県)の一部区間で着工してから、各地に森林鉄道の路線網が拡大した。しかし、1960年代に木材の資源が枯渇した山が相次いだことや、林道の整備により搬出手段がトラックに切り替えられたことなどから、現在ではほとんどの森林鉄道が廃止された(西2014)。
- (2) 経済産業省(2009)により、森林鉄道は「山間地の産業振興と生活を支えた森林鉄道の歩みを物語る近代化産業遺産群」としてまとめられている。
- (3) まむろ川温泉梅里苑の資料によると、2013年の利用者で最も多い月は9月の806人、次いで多いのが5月の682人であった。なお、2014年の利用者で最も多い月は5月の984人、次いで多いのが9月の730人である。
- (4) グループには原則として1人に調査票を配付したが、一部のグループには2~5人に配付した。したがって、5月4~6日には109グループと1個人に調査票を139枚、9月13~15日には70グループと4個人に調査票を82枚配付した。
- (5) 同行者の属性・利用交通手段(調査項目①、⑥に該当)を、回収時に記入者への聞き取り調査で明らかにしたことも含まれる。
- (6) 国勢調査によると、東根市の2000~2015年の人口は44,800、45,834、46,414、47,768である。
- (7) 2014年は4月26日~5月6日に開催。
- (8) DCの期間に観光などで山形県を訪れたことに対する感謝の気持ちを表現するため、山形DC推進協議会(本部:山形県庁)は県民にプロジェクトへの参加を呼びかけた。具体的には、走行する「とれいゆつばさ」91号(福島~山形~新庄間)と「SL「山形日和。」陸羽西線」号(新庄~余目(あまるめ)~酒田間、余目~酒田間は羽越本線)に向かって手を振るものである。両列車は新庄市内を通るため、沿線では新庄市民の参加が多くみられた(2014年9月14日付「山形新聞」の「「山形日和。」これからも一笑顔の最終日3カ月間の「山形DC」締めくくる」、2014年10月1日付「最上エコポリス通信」(山形県最上総合支庁)の「山形DCフィナーレ!山形DCありがとう!」、2014年10月9日付「広報しんじょう」の「山形デスティネーションキャンペーン閉幕(市内各所)」などによる)。
- (9) 2014年5月4日付「山形新聞」の「木々を縫いコトコト」による。記事では森林のなかを走行するトロッコ列車の写真が大きく掲載されている。
- (10) 「つばさ」号は東京駅を発車後、上野駅(東京都)、大宮駅(埼玉県)、宇都宮駅(栃木県)に停車する。
- (11) ここでは、定員が5~6人(運転手1人、乗客4~5人)のセダン型車両の一般タクシーをさす。
- (12) 二次交通とは、通常一般タクシーを除いた手軽に使える交通機関をさし、地域公共交通と同義である(大島登志彦・中牧 崇2016)。なお、真室川町以外で、地方の観光地における二次交通の脆弱さを指摘した論文として、岡本勝規(2004)、間 貞磨(2013)、大島・中牧(2016)、石関正典(2017)などがある。
- (13) 同行者も記入者と同じ施設を利用した、あるいはこれから同じ施設を利用する(予定)ものとして扱った。なぜならば、同行者と記入者の大半が家族(+親戚、友人・知人)、二世帯あるいは三世帯で構成されていることによる(3.1参照)。
- (14) 記入者に、今回梅里苑へ訪れた目的について質問してみると、「現地へ訪れること自体が目的」は全6日間で141人である。このなかには、観光(旅行)・帰省の途中に訪れるケースも含まれる。
- (15) 同行者も記入者と同じ施設を利用した、あるいはこれから同じ施設を利用する(予定)ものとして扱った。なぜならば、注(13)と同じ理由であるほか、同行者と

記入者の利用交通手段が同じであるケースがほとんどであることによる。

- (16) 2014年(第41回)は4月29日～5月5日に開催。なお、「カド焼き」の「カド」はニシンをさす。新庄市などではニシンを春告魚として食べる風習がある。
- (17) 小杉の大杉は、アニメ映画「となりのトトロ」(監督:宮崎 駿氏、1988年)に登場する不思議な生き物の「トトロ」に形状がよく似ている。また、2014年(第15回)のマラソン大会は9月14日の開催で、小杉の大杉の前がコースになっている。

参考文献

- 間 貞磨 (2013) 「地域交通が演出する自分の足で回る観光」、観光とまちづくり、551、pp.20-23.
- 石関正典 (2017) 「中小私鉄事業者の観光開発とバス事業の展開に関する考察—第二次世界大戦後の群馬県を事例として—」、えりあぐんま、23、pp.1-19.
- 大島登志彦・中牧 崇 (2016) 「新潟県上越地域における鉄道遺産の活性化のあり方と地域公共交通の課題」、高崎経済大学論集、58-4、pp.1-15.
- 岡本勝規 (2004) 「観光客誘致と公共交通」、とやま経済月報、平成 16 年8月号. (「とやま経済月報」は web 版の月刊誌)
- 岡本憲之 (2013) 『究極の現役ナローゲージ鉄道』、講談社.
- 経済産業省 (2009) 『近代化産業遺産群 続 33～近代化産業遺産が紡ぎ出す先人たちの物語～』、経済産業省.
- 経済産業省地域経済産業グループ編 (2010) 『近代化産業遺産「観光」活用ガイド』、経済産業省.
- 国立文化財機構奈良文化財研究所編 (2008) 『高知県中芸地区森林鉄道遺産調査報告書』、中芸地区森林鉄道遺産を保存・活用する会.
- 白川 淳 (2008) 『全国歴史保存鉄道』、JTBパブリッシング.
- 中牧 崇 (2014) 「勝手に東北世界遺産 第 118 号森林トロッコ列車」、朝日新聞 (東北版)、2014 年8月 16 日. (朝日新聞山形総局の米沢信義氏から取材を受けたもの)
- 中牧 崇 (2017) 「山形県真室川町における森林鉄道の保存機関車の活用—地域資源の価値づけとその内外への発信に着目して—」、現代社会研究、14、pp.93-100.
- 西 裕之 (2001) 『全国森林鉄道』、JTB.
- 西 裕之 (2014) 『特撰 森林鉄道情景』、講談社.
- 矢部三雄 (2015) 「近代化遺産「森林鉄道」路線の記録」、フォレストコンサル、142、pp.13-19.

資料1 アンケートの調査票

森林トロッコ列車の利用に関するアンケート

- ・本アンケートは、森林トロッコ列車を運営する「まむろ川温泉梅里苑（ばいりえん）」からの許可を得ております。この調査票は、乗車される方（乗車された方）に渡しております。どうぞ協力をお願いいたします。
- ・選択肢の回答では、当てはまる番号に○をお付けください（「その他」の箇所は可能であればご記入ください）。

①-a 年齢等 (1) 高校生以下 (2) 大学生・専門学校生など (3) 20歳台（大学生・専門学校生などを除く）
(4) 30歳台 (5) 40歳台 (6) 50歳台 (7) 60歳台 (8) 70歳台 (9) 80歳以上

①-b 性別 (1) 男性 (2) 女性

①-c 居住地 _____ 都・道・府・県 _____ 市・区・町・村

①-d 同行者の有無について、次から1つお選びください。なお、(2)～(6)では人数をご記入ください。

(1) なし（自分1人） (2) 家族（自分を除いて 名） (3) 友人（自分を除いて 名）
(4) グループ（自分を除いて 名） (5) その他（ _____、自分を除いて 名）

②今回までの森林トロッコ列車の乗車回数を、次から1つお選びください。

(1) 今回がはじめて (2) 今回で2～3回目 (3) 今回で4回目以上 (4) その他（ _____ ）

③森林トロッコ列車の存在をはじめてお知りになられたのは、どのような形でしたか。次から1つお選びください。

(1) まむろがわ温泉梅里苑のホームページをみて
(2) 真室川町役場のお知らせ（「広報 まむろがわ」やホームページなど）をみて
(3) 上記(1)と(2)以外のホームページをみて (4) 旅行会社の案内をみて
(5) 旅・鉄道関係の図書をみて (6) 家族・友人からの話を聞いて (7) 駅にあるパンフレットをみて
(8) その他（ _____ ）

④森林トロッコ列車の保存機関車が国の貴重な産業遺産（近代化産業遺産）に認定されていることは知っていましたか。どちらかお選びください。

(1) 知っていた (2) 知らなかった

⑤今回はどのような目的で、まむろ川温泉梅里苑へ訪れましたか。〔複数回答が可能です〕

(1) 梅里苑へ訪れること自体が目的 (2) 観光（旅行）の途中 (3) 帰省の途中 (4) その他（ _____ ）

⑥まむろ川温泉梅里苑までの利用交通手段を、次から1つお選びください。

(1) 自家用車 (2) 団体旅行のバス (3) 鉄道+真室川町営バス
(4) 鉄道+レンタカー（レンタカーを借りられた最寄りの駅をご記入ください。 → _____ 駅）
(5) 鉄道+タクシー（タクシーに乗車された最寄りの駅をご記入ください。 → _____ 駅）
(6) その他（ _____ ）

⑦今回まむろ川温泉梅里苑へ訪れたことを含めて、観光（旅行）・帰省などの日数を、次から1つお選びください。

(1) 日帰り (2) 2日 (3) 3日 (4) 4日 (5) 5日 (6) その他（ _____ ）

⑧今回森林トロッコ列車の乗車のほか、まむろ川温泉梅里苑内にあるもので、すでに利用された施設はありましたか。あるいはこれから利用される（予定の）施設はありますか。〔複数回答が可能です〕

(1) 温泉 (2) 宿泊 (3) 買物 (4) 食事 (5) 公園（遊具を含む）
(6) 炭焼き体験の施設 (7) とくになし (8) その他（ _____ ）

⑨まむろ川温泉梅里苑のほか、観光ですでに訪れた市町村、あるいはこれから訪れる（予定の）市町村がありましたら、ご記入ください。なお、市町村名でなく、観光地名でのご記入も可能です。〔複数回答が可能です〕

アンケートのご協力、誠にありがとうございました。

※実際の調査票はA4が1枚（表面だけ印刷）である。また、①、⑥は調査票の回収時に、同行者の分を記入者への聞き取り調査で明らかにした。